

古城の歌

田中澄江



古城の歌

田中澄江



古城の歌

定価五〇〇円

印刷／昭和47年3月20日

発行／昭和47年3月25日

著者／田中澄江

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
振替東京八〇八 電話東京二六〇一一一一

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／新宿加藤製本株式会社

© 1972. Sumie Tanaka. Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

目次

(一)	鳥取にゆく	5
(二)	吉川経家という名	15
(三)	久松山の戦い	21
(四)	湖山のひと	39
(五)	別所長治の悲劇	56
(六)	吉川経家の苦悩	72
(七)	はじめての夏に	92
(八)	そのひとは吉川なみ子	123
(九)	過ぎてゆく夏の中で	158
(十)	そして秋。京都で	183

古
城
の
歌

(一) 鳥取にゆく

(一) 鳥取にゆく

鳥取の中学三年生が、五月の末に京都へ修学旅行にくる。京都に三泊、奈良に一泊、大阪に一泊の予定で、ゆきは中国山脈の北方の斜面が海にせまるあたりを通る山陰本線をつかい、かえりは大阪から、中国山脈を横断して、福知山をまわる線である。もしできれば、修に京都で会いたい。京都の宿は三条通りを西にはいったところだ、という手紙が、市田からとどいたのは、四月のはじめである。

修が母と疎開地の鳥取から、京都に移り住んで三年目、修は鳥取の小学校でいっしよだった市田よりは一年おくれて、中学の二年を迎えていた。

戦争が終わった年から二年たった夏に、修の長いあいだの、からだの弱さが、脳に

腫瘍しゅようができていたためとわかり、修は手術のために母につれられて京都に来て、それから一度も鳥取に帰っていない。

嵯峨さがの広沢ひろさわの池に近いこの家は、手術のあとのレントゲン治療ちりょうで、まだ当分は京都の病院に通わなければならぬため、父が鳥取の家を売り、一家をあげて引っ越こしてきたのである。

君ももうすっかり元気になったことと思います。ぼくもこのあいだの体格検査で百五十四センチになっていました。体重は四十八キロです。これでは少し肥満型なので、四十キロぐらいに減らしたい。それでこの春休みは毎日必ず久松山きゅうしょうざんに登りました。ことは椿つばきがいっぱい咲いて、その梢こずえのずっと向こうにまだ雪のある大山だいせんの見えるのがいい眺めながめでした。京都もまわりをぐるっと山がとりまいているそうですが、鳥取の久松山のように形のいいのがありますか。嵐山あらしやまはどうですか。地図の上で見ているだけなので、じっさいに見てみないと久松山とくらべることはできない。早く五月になればいいと思っています。

作文用紙にきっちりとした書体で書きこまれた手紙の文字もおとなびていて、もう別れて二年の月日に、かれも子供から青年の世界に成長していることがしのばれた。

鳥取の言葉にはかなり強い訛なまりがあるけれど、隣となりあった席で、はじめて市田に向こ

うから、

「君の家はどこだよ？」

鳥取言葉で声をかけられたとき、そのひびきののどけさに、修の心の中に抱かれていた新しい土地の、新しい学校への緊張が、やわらかくとけていった。

「湯所だ」

「そうか。そんならぼくのうちに近いわなあ」

「君の家は？」

「湖山へゆく途中。千代川の向こう岸じゃ」

湖山も千代川もまだ眼でたしかめたことはなかったが、市田の言葉を聞いてみると、そこがひとつも自分の知らない土地ではないような親しみを感じた。

修の母の実家は、古くからの東京住まいであったから、なにかと訪ねてくる母方の親戚や知りあいはすべて東京に古くからいる者ばかりで、修は、鳥取にくるまで、東京以外の地方言葉というものをあまり耳にしたことがなく、同じ年ごろのものからじかに鳥取言葉で話しかけられたのは、市田がはじめてであった。昭和十九年の六月である。

十六年の十二月八日に開始された太平洋戦争が、三年目を迎えて、はじめのころの勝利のあとをつぎつぎ敵の手にはうばいかえされ、政府は、東京や大阪をはじめとする全国の主要都市に敵の空襲の必至であることを憂えて、老人や子供たちの疎開をすすめはじめた。

修たちの一家は、そのほとんど第一陣のようにして、中央線沿線の家をはなれた。「鳥取にゆけば、東京よりは食糧があるでしょう。修ちゃんのからだも丈夫になるでしょう。克ちゃんも遊ぶところがたくさんあるわ」

修は小学校にはいったころから、走ると頭痛がしたり、吐き気がして、よく医者にかかる虚弱児童であった。

母のみね子は、東京以外の地方を知らない修や、まだ幼稚園の克に、できるだけ家をはなれる不安をとりのぞいてやろうとでもするように、遠足にでもゆくような気安さで語ったが、このとき、大学の言語学の講師をしていた父の哲は、戦時に不必要な講座を閉ざすという大学の方針によって職を失い、九州の哲の両親は、哲の弟の信を若い軍医として南方で失ったのである。七十歳と八十歳の老人にとっては、自分たちのいのちを奪われる以上にたまらないことであり、その悲報が、電文によって東京の哲のもとに届いたとき、母の心はきまった。

「鳥取にゆきましよう。御両親を空襲であぶない九州から鳥取にお移ししていっしょに暮らしましよう」。嫁としてせめて、深く傷ついた両親に孝養をつくすのが、最大にして緊急の義務と考えたのである。哲の父は医者であり、その病院は、東京の大学の文科を出た兄に代わって、弟の信がつぐはずになっていた。信が志を果たさずに戦死したあとは、修か克に、医者になってほしい。そのような願いをこめた手紙を、何度か、九州の祖父は父に書いてよこした。

「とにかく子供たちがそばにいれば、少しは気がまぎれるかもしれないからね」
両親の悲しみを思つて、父も賛成した。

「修ちゃんも元氣を出して、おじいさん、おばあさんをなぐさめてあげてね。克ちゃんと仲よくして、学校の勉強もよくしてね」

疎開の荷物をつくりながら、あるいは鳥取へと東京をたった汽車の中で、母はくつかえし子供たちに言いきかせた。

叔父の出征は克が生まれて間もなくであつたから、その思い出は、修にだけあざやかに残っていて、母からはげまされるまでもなく、あのやさしかった叔父さんが、敵地に上陸してすぐのときに、負傷した部下を助けようとしておどり出たとき、敵の攻撃を浴びてたおれたという話を、自分の全身に弾丸がうちこまれたような痛さで聞い

たのである。

どんなに苦しかったであろう。生身なまみの肉にするどい弾丸が突きささり、弾丸は肉の中で破裂はれつして血管をずたずたに断ち切る。弾丸は頭にも顔にも眼にも口にも火をふいて突入し、あの金ぼたんの制服で、角帽かくぼうをかぶって、修を肩車かたぐるまにのせて、庭石の上を声をあげて数えながら、ぴよんぴよんととんでくれた叔父は、叫さけぶひまさえなくて、いのちを失ったのである。

叔父さん、叔父さん、かわいそうな叔父さん、ぼくの大好きだった叔父さん。むずかしい医科大学の入学試験に合格し、中学校と大学と、合わせて十年も勉強して、その上になお医局にとどまって、博士論文を書くための勉強をしている途中で戦争にとられ、声一つあげるひまもなく、二十四歳のいのちを断たなければならなかった叔父さん。ぼくがきくと叔父さんのできなかった、残りの勉強をしてあげる。叔父さん、死にたくなかったでしょう。おじいさんやおばあさんを残して。

修は仏壇ぶつだんの横にかざられて、黒いリボンで結ばれた額がくの中にはいつてしまった信の写真にむかって、いつもこのような言葉で心の中で話しかけた。修の家の仏壇は、叔父が戦死してから、新しく父が求めてきたものである。父は朝に夕に水を供え、香こをたき、鐘かねを鳴らして、しばらくその前に立っていることが多かった。母のようにたく

さんは物を言わなかったが、たった一人の弟を失った父の悲しみは、母よりももっと深く、もっと重いのであろう。だまって叔父の写真を見つめている父の背に、修はその心を感じとって、やっぱりだまって立っていた。

兵隊服を着て、兵隊の帽子をかぶってはいるけれど、輸送船に乘せられて、わずか二か月のあとに、そのいのちが断たれるなどとはゆめにも思っていなかったのである。口元に、いつものやさしい微笑が浮かび、その顔には、未知の世界への進入を前にした、若ものの明るいかがやきがあった。

日本の地図をひろげると、鳥取県は、京都や大阪をふくむ近畿地方を軸として、北東と西南の方角にむかって弓形にのびている日本列島が、日本海をつつんでいる側にある。ゆるやかな弧をえがく海岸の部分と、弓の中心になる山脈の部分にわかれて、東は兵庫県、西に島根県と接し、緑の平野よりは、茶いろの山の面積の方が多い。

中国山脈とよばれる山岳地帯は、南になだらかな勾配で瀬戸内海にのぞみ、北の日本海側は、海にせまって、山が岬や半島となつて落ちこんでいる。

東京から京都を経て福知山ぐらゐまで平野部を走った汽車は、西北に急な角度をとつて、古くから温泉で名高い城崎をすぎると、トンネルにつづくトンネルで、この海

に沈^{しず}もうとする中国山地をひた走りにつらぬいて進む。

東京を夕方に出た汽車は、福知山あたりで夜が白みはじめ、修が眼をさましたときは一つのトンネルを抜^ぬけて、次のトンネルにさしかかっていた。何という海の、何という浜^{はま}べかは知らぬ。岬と岬にはさまれたわずかな水平線から陽^ひがのぼって、空も海もいちめんの朱紅^{あけ}に染められ、その朱紅はまた、空や海の紺碧^{こんぺき}にとけこんでいた。海は汽車の窓のすぐ真下にまでせまり、岸の岩を洗う波は、底の石が数えられるような透明^{とうめい}さであった。

その海と、その空の美しさをどうたえよう。

「お父^{とう}さん、あの空」

「ああ」

「お母^{かあ}さん、この海」

「ああ」

修が息をのんで見入るまもなく汽車はまたトンネルに。空と海の朱紅はトンネルをいくつか数えるたびにうすらいでいったが、空の青と海の青は、陽がのぼるにつれていよいよ濃^こさを深めてゆくようであった。

父も母もはじめのうちは修と同じように声をあげたが、二人^{ふたり}の幼い子供をかかえて

(一) 鳥取にゆく

の夜行列車の旅に疲れきつたらしく、トンネルにはいるたびにいがらっぽい煙が毒ガスのように車内に充満しても、眼をあけることもなく半ば眠りこんでしまっていた。もたれかかってくる克の横で、修だけが窓の枠にしがみつくようにして、刻々と変わる外の景色を眺めつくしてあきなかった。

鳥取の町は、昭和十八年の大地震でひどくいためつけられたというけれど、ほとんどが瓦屋根の家並みは、大きく緑のかけも濃い久松山の、三角形の山すそにしまっていて、ひと眼で見わたされるような広さであった。

祖父がずっと九州で暮らしたので、松永家の鳥取に古くからあった家は、もう何十年も前に売りはらわれ、父も叔父も九州で育った。母にとっては、新婚旅行に父と訪ねて以来の鳥取であり、父もそれ以前の学生時代に一、二度いっただけで、今度住む家は、疎開のために新しく求めたのである。

駅に着いて、あれが殿様のお城のあった久松山だと、父に、すぐ眼の前の三角形の山をさし示されたとき、修は叫んだ。

「あ、飛行機」

町の真正面にそびえたつ山の右の肩に、黒くつばさを広げたものがゆったりと円をえがいていた。

「飛行機なんぞではありゃあせん。あれは鳶とんびですわいな。鳶が舞もうておるのです」
出迎えた親戚たちのなかで、目立って背の高いおばさんが大声でわらった。モンペの上着に支部長と書いたきれいの札ふだをつけていた。婦人会の中でえらいひとなのだと別のおばさんが言い、遠いところをよく来たとか、疲れたであろうとか、いろいろといったわって言うてくれる言葉が、あまりにも東京とはちがうひびきに、修の心にはじめてこれからは、ただ美しい景色の中だけで暮らすのではなくて、東京とはちがうひとたちの中に住むのだという思いがかすめた。ここでの親戚はすべて父方であり、ひとびとは多く父にむかって語りかけ、母は自然と、克の手をひいて父のずっとうしろをついて歩いてゐる。東京では、父と母とはたいい並ならんで歩き、足の速い母の方が、父の前をゆくときも多かったのである。

プラットホームから駅の表に出るまでに、急に父の姿が大きく見えたのも、はじめて気づいたことであつた。